

若干の文献をあげておきたい。]

- J. M. Bochenski, *The Logic of Religion*, New York University Press, 1965.
- Thomas Bonhoeffer, *Die Gotteslehre des Thomas von Aquin als Sprachproblem*, J. C. B. Mohr, Tübingen, 1961. (昭40, 第十四回中世哲学会において小山宙丸氏が紹介)
- William Bryer, *St. Thomas and the Existence of God. Three Interpretations*, Henry Regnery, Chicago, 1951.
- Bowman L. Clarke, "How Do We Talk about God," *Modern Schoolman*, xlv, 2, 1968.
- W. Norris Clarke, "Analytic Philosophy and Language about God," *Christian Philosophy and Religious Renewal*, ed. G. F. McLean, Catholic University of America Press, 1966.
- Vincent Fontana, "Linguistic Analysis and Inference about God," *Thomist*, xxxii, 2, 1968.
- Lucien Martinelli, *Thomas d'Aquin et l'analyse linguistique*, J. Vrin, 1963.
- Josef Pieper, "The Meaning of 'God Speaks'," *The New Scholasticism*, xliii, 2, 1969.
- John Smith, *Religion and Empiricism (Aquinas Lectures)*, Marquette University Press, Milwaukee, 1967.

---

F. コプルストン著、箕輪秀二、柏木英彦訳、中世哲学史、昭和45年1月、東京、創文社刊行。pp. 6 + pp. 828 + pp. 28。

長澤信壽

本書はフレデリック・コプルストン (Frederick Copleston) の大著 *A History of Philosophy* (The Bellarmine Series, published for the Jesuits Fathers, Burns Oates and Washbourne Ltd., 1950. —同じものが A Doubleday IMAGE

Book のなかに各冊が二分冊されて刊行されている)の中世哲学史の部分、すなわち第二巻“Augustine to Scotus”の全体と第三巻“Ockham to Suarez”の第一部“The Fourteenth Century”とを翻訳したものである。原著者がこの“哲学史”第一巻の序で語っているところによれば、本書の書かれた主要な動機は、普通カトリック教会の学校で用いられているよりも詳細な且つ広範囲にわたる哲学の歴史を供給し、同時に哲学思想の論理的発展ならびに哲学体系間の相互の関係を明らかにすることである。そういう動機から本書は単に中世哲学だけではなく、古代ギリシアから始まって最近の観念論に対する反対運動まで取りあつまっている。本書は近来稀れに見る広汎な大著であって、今まで出版せられたものは全部で八巻までであるが、おそらくこれが最後の巻なのであろう。著者はイエズズ会に属する人であるが、しかしそのために学説がゆがめられているようなところは、全般にわたって、少しも認められず、極めて公平な態度で学説の発展を忠実に述べているようである。訳者箕輪、柏木両氏は、人も知るように、さきに協力して同じ著者が Home Study Books の一冊として1952年に出版せられた“Medieval Philosophy”(中世の哲学)を翻訳した人である。その翻訳は極めて名訳である。そこでわれわれはまず、同じ共訳者によって、この度、同じ著者の代表的名著が邦訳せられ、自国語をもってこの名著を読み得ることを喜ばなければならぬ。中世哲学に関する部分だけが訳されたと言ったが、それでも一ページ五十七字二十行詰で800余ページに余る大著である。しかし日本語として極めて読みやすく、翻訳書を読む際にしばしば感じるところの、主として発想の相違に基づく意味の不徹底さや晦渋さを殆んど感じることのない位よく訳しこなされている。これは固より両訳者が非常に骨を折られたことにもよるが、同時に、前記小著の翻訳の経験を生かし、またコプルストンの文章に習熟せられていたことに起因するものであろう。私はこの大著を極めてやすやすと読み通し得たことを両訳者に感謝したい。そうは言っても何分にも800ページに余る大著であるからしばしば首をかしげるところがないと言うのではない。例えば、p. 80 “彼(アウグスティヌス)は神に対する自然の関係と、神に対する自然の依存とを強調するのに特に適していると思われるような面を力説したからである”という文章は、どういう意味か、一寸、理解することができなかった。これは、原文を見ると、“自然

が神に対する関係と、自然が神に対する依存とを強調する……”と訳されたならば、一層、理解し易かったのではあるまいか。これに類したところが、さらに一二見られた。序に“The Pseudo-Dionysios”の訳語について述べておきたいが、これは、わが国ではほとんど——この両訳者をもふくめて——大抵“偽ディオニシウス”と訳されているようである。(ギ・ディオニシウスと発音するのかニセ・ディオニシウスと発音するのかわからないが)、しかし“偽ディオニシウス”では何のことか理解し難い。英語と日本語とは表現の仕方が異なるから、英語では Pseudo- が前に出ているとしても、これはむしろ“ディニュシオスの偽書”とすべきものではないかと思う。一体に、わが国では中世哲学の用語の訳語が定っていない。これは、現下の日本の状況では或る程度やむを得ないかも知れないが、もう少し一致があってもよい筈である。例えば本書では聖アンセルムスの ontological argument を“本質論的証明”(cf. p. 75)と訳しているが、これは聖アンセルムスの真意を伝えないばかりでなく、誤解をまねく恐れさえあると思う。某所発行の“キリスト教大辞典”ではアンセルムスの“Cur Deus homo”を“いかにして神は人となられたか”と訳しているが、Cur を“いかにして”と訳しては、アンセルムスの真意を伝えるどころか、もはや誤訳に近いであろう。

評者自身がアウグスティヌスやアンセルムスに特に関心をもっている関係上、本書の前半に、なかなずく rationes seminales, 愛の倫理説について述べられているところに非常に教えられた。ページの配分も概して穏当であると思うが、比較的少ないページのなかに、アンセルムスの根本説を要領よく纏められたことにはまったく敬服した。

中世哲学がいつの時代にどこから始まり、いつの時代まで続いたか、に関しては今までしばしば論ぜられ、それぞれの学者によって、その見るところを異にして来た。われわれもコブルストンの説をもって唯一の正しい説と断定することはできないであろう。しかし著者は本書の序論において、この第二巻および第三巻とで中世哲学の百科全書を作るつもりはないが、また中世哲学の単なる概略もしくは一連の印象を、時代の推移を追いながら述べて行こうとするものでもないと言っている。著者は“森ばかり見て木を見失うとか、木ばかり見て森を見失うのは容易であるが、このいずれをも同時に見ることは容易ではない”と言っている

(pp. 10 f)。これは著者の立場をよく示す言葉であって、著者は取るべきところを取り、捨つべきところを捨てている。著者は、この困難な仕事を可なり大胆に企てた。そこにおそらく異論を挿む余地があるであろう。ところで著者は中世哲学を三つの段階に分ける。第一は第十二世紀までとこの世紀を含む予備的段階である。第二は第十三世紀の構成的総合的時代である。第三は没落してゆく破壊的な批判的な時代である。この三つの段階の後に、著者は後代の哲学との比較の問題に言及している。しかしいずれの時代にもせよ、哲学的立場なしには歴史書は書けないというのが著者の主張である。

もう少し具体的に本書全体の構成を述べよう。本書全体の構成は、第一部で厳密な意味での中世以前の諸学派を、第二部でカロリング・ルネッサンスを取りあげている。第三部では第十、第十一、第十二世紀を、第四部ではイスラム及びユダヤの哲学を、第五部では中世哲学の最盛期を取りあげている。本書の著者の最も力を注いだのは、おそらく、この第五部であろう。ここではボナヴェントゥラ、トーマス・アクィナス、スコトゥス等が論述せられている。もっとも彼のトーマス・アクィナス解釈については、別にベリカン叢書のなかによい意味で通俗的に書かれたものがあって、稲垣氏の日本語訳が出版せられているが、ボナヴェントゥラ、トーマス、アリストテレス論争、スコトゥスとの関連において、この時代の哲学思想の動きやその脈絡を極めて明快に示している点において、第五部は重要であろう。評者自身も第五部第四十五章乃至第五十章のスコトゥスの解釈から学ぶところが多かった。この難解の哲学者を、これほど明快に解明したものは少ないと思う。第六部は、さきにも言及したように、原著第三巻の翻訳であって、主としてオッカムが取りあげられ、思弁的神秘主義に言及せられている。この一章の中で第十四世紀の神秘思想、エックハルト、タウラー、ズーゾーその他が一括して論ぜられているが、これは哲学思想上の重要性ならびに後世に及ぼした影響から考えれば、章を分けても、もう少し詳しく詳細に論じて欲しかったと思われる。

原著には主として出典を示した脚註があるが、訳書では煩をいとわずこれが巻末に一括せられている。また原著には巻末に A Short Bibliography があげられている。そして General Works と各章もしくは各哲学者または問題別に分けて、

原典、翻訳、研究文献等々があげられている。これは決して詳細なものではないが、極めて実用的であって、非常に便利である。評者自身絶えず参考して利益を与えられている。ところがどういふわけか邦訳ではこれが省かれている。もっともその代りかどうか知らないが、邦文の参考書があげられているが、これには可なり脱落があるし、今日のところ日本語の文献だけで中世哲学を研究(?)することは殆んど不可能である。どうしても外国の文献のお世話にならなければならない。再版の折には是非補正してこの支献をあげていただきたいと思う。そのほか巻末に事項および人名の索引と引用書目があげてある。

---

稲垣良典著・トマス・アキナス哲学の研究

昭和45年3月 東京・創文社 本文353頁

宮内久光

本書は、まえがきに示されてあるようにトマス・アキナスの哲学における「経験主義」の研究である。著者の永年の研究の成果である数多くの論文が、それぞれ独立した主題を扱いながら、「経験主義と形而上学とを統一的に理解する」試みとしての本書において適しく位置づけられているばかりでなく、一貫した視点の下に見事に統一されていることに先ず心からの敬意を表したい。

トマス思想の経験主義的要素の強調は十九世紀以来のトマス解釈のかたよりに対する解毒剤として意義がある。(323頁)のみならず、トマスの「経験主義」的態度はたとえば認識理論においてはロックのような古典的経験論哲学ならびに現代の経験主義に劣らぬほど徹底していた。即ちトマスが知的認識の感覚的起源を語るばあい、感覚を通じて個物から受けとられるのは、人間の知的認識の素材ないし質料のみに限られるのではなく、知的認識のすべてが、その可知性全体において、感覚に起源を有することが主張されていて、感覚的経験に依存しないアブリオリ認識のごときものは一切斥けられている。(13章)しかし今日経験主義という言葉には形而上学の否定という意味が含まれているが、トマス自身は形而上